| 報告番号 | ※　　第　　号 |
|---|---|

# 主　論　文　の　要　旨

論文題目　澁澤龍彦文化圏の研究──サド裁判から押井守まで

氏　　名　水川敬章

## 論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、澁澤龍彦が形成した文化圏（以下、澁澤文化圏と略す）についての研究成果をまとめたものである。3部構成となっており序章・終章、および以下の7つ章から構成されている。

第1部においては、澁澤龍彦文化圏の文学的・批評的・思想的可能性について、以下に説明する三つの章から議論を行った。第1章においては、『唐草物語』の幻想性が如何に担保されているのか、そのシステムを、先行論の指摘を踏まえた上で、文学ジャンルの読書の制度の問題と、作家の実存的身体イメージの受容の問題から議論した。そこでは、澁澤という作家の実存的な身体が澁澤文学の受容者に強く認識されること、それ故に『唐草物語』のエッセイの部分が、より実存的な内容として読者に読み解かれること、そして、そのことが小説の叙述とコントラストを成して、幻想性が発揮されることを論じた。ここでは、小説のシステムのみならず、澁澤という作家が、身体という実存イメージを纏っているという点が重要であった。このことは、文学という言語を通して可能となる表現が、実のところ視覚的イメージ、しかもそれが単なる視覚的イメージではなく、澁澤の身体という実体的存在を指向することが重要であった点を議論した。

第2章では、サド裁判に関する議論を展開した。ここでは、澁澤がサド裁判に直面した際にとった文学的営為を、言説資料から再構成し、その批評的意義を探った。ここでは、サド裁判を澁澤の作家的自己に関する危機とみなした上で、その状況に対して澁澤が「勝手気まま」という戦術を採用してその危機の乗り越えをはかろうとしたことを論じた。澁澤が直面した作家的自己の危機を、公権力や法的権力によって主体が構築されてしまうという構築主義の暴力に直面したことであったと規定し、その暴力に対抗する批評的強度を持った闘争としてサド裁判を位置づけた。その際にトロツキーに関する澁澤の言説編成の特徴を分析し、それが当時の澁澤の戦術と重なること

を指摘し、その闘争の現代的な思想的批評的意義について分析を加えた。

第３章では、澁澤文化圏のなかでも重要な表現者であった土方巽の舞踏に対する批評をめぐって、それらが如何なる批判的な力および、その問題点を論じた。ここでは、種村季弘や澁澤龍彦の土方に関する批評を主たる分析対象とした。その分析を通じて、土方をめぐる東北に対するイメージが差別的な視角において形成されたこと、そしてまた、土方の舞踏を語る言説が「小児マヒ」という比喩で語られたことについて、政治哲学者ジャック・ランシエールの理論を導きに、次のように論じた。澁澤たちの批評は「凡庸」な差別意識に依拠する表現であり、そのような差別意識に満ちた比喩を用いた批評を展開することで、マジョリティの感性において、土方の前衛的な表現が感受可能になることを述べた。その上で、澁澤たちの批評の方法が、同時代の障害者運動と相同的なものであることについて、その理論的検討を行った文章を参照しながら議論した。

第２部は、澁澤文化圏の問題性と限界性を明らかにする目的で設けられた。第２部は次にまとめる第４章と第５章によって構成されている。第４章では、澁澤龍彦が責任編集をつとめた『血と薔薇』に関する分析を行った。本誌の創刊号から第３号まで、言説および図版の整理を行い、そこから導かれるイメージについて議論を行った。ここでは、本誌の言説と図版が相互作用し、反キリスト教的なイメージや同性愛のイメージなどを展開させていることを指摘した。その上でこの雑誌のイメージ群に内在するアナクロニズムの問題を、澁澤のアナクロニズムの方法と照らし合わせながら、その思想的意義について検討した。そこから、本誌のセクシュアティの問題を女性の能動性イメージとマゾヒズムの問題から検証し、澁澤文化圏に宿る男たちの欲望が、女性をオブジェ化すると同時に、女性によって支配されるというマゾヒスティックな欲望を湛えていたことを指摘した。

第５章では、第４章での議論を受けて、雑誌『an･an』について検討を行った。ここでは、依田富子の『an･an』に関する分析を導きにして、それを批判的に継承し、議論を構築した。依田は、『an･an』がウーマン・リブと紐帯を持つことを指摘している。そこで指摘された『an･an』が保持するリブ的なイメージを、『血と薔薇』で検討した澁澤文化圏における女性にまつわるイメージとの関連性から再解釈した。『an･an』の企画である「ファミリーヌード」をめぐる言説や、「お見合いヌード」、「赤ずきんちゃん」などの翻訳記事の誌面を通じて、それらが、澁澤文化圏の性的価値規範と密通してしまうイメージであることを、岡田温司が理論的に検討した「ディアファネース」という概念等を参照しながら論証した。その上で、澁澤文化圏が呈する女性への抑圧的で暴力的な欲望の表現が、拭いがたい強度を持つ宿痾であることを論じた。

第３部では、澁澤文化圏が現代に登場した作品に如何なる余波を与えたのか、それを押井守の作品を通じて論じた。第６章では、アニメ映画『イノセンス』の読解を通

じて、澁澤文化圏の人形と少女をめぐる価値規範との関連性について議論した。『イノセンス』には、球体関節人形が登場するが、この人形を日本に根付かせたのが澁澤文化圏であった。この点に着目し、次のように議論を展開した。まず、『イノセンス』の登場人物の草薙素子の表象について分析をおこない、その暴力性の質について検討を行った。そこから、素子は暴力を行使するという表象と暴力を被るというバイナリーな表象の問題を持ち、更に、具体的な警察権力を監理・監視する力を発揮し、男性抑圧的なジェンダー規制に暴力的に対抗していたことを明らかにした。その上で、本作に登場する球体関節人形と素子の暴力表象の関係性を、澁澤の球体関節人形をめぐる価値規範と比較から検討した。そこから『イノセンス』が図らずも澁澤文化圏の少女や人形をめぐる価値規範に対抗する表象を展開していたことを論じた。その上で、「イノセンス」の暴力表象の意義について、精神分析などの枠組みを駆使した批評言説と取り結ぶ緊張関係から検証した。

第７章では、押井の少女表象の問題を、更に深く検討するために、押井が原作を務めたマンガ作品『腹腹時計の少女』について分析を行った。ここでは、押井作品における全共闘運動と女性表象の問題が中心に扱われた。本作のみならずいくつかの押井作品に登場する「赤頭巾の少女」をめぐるイメージを『腹腹時計の少女』の関連作品である『人狼』に登場する少女などとの比較分析を通じて論じた。その上で、本マンガ作品における「赤頭巾の少女」のイメージが、少女が存在することとしないことの間で揺れ動くものであることを指摘した。このイメージは、存在可能性を示すことで、女性たちの抵抗可能性を示す一方、その消滅を明確に描き出すことで、彼女たちを消尽し尽くすような暴力性を提示するものであった。この限りにおいて、押井の全共闘運動を描いた作品における少女表象が、澁澤文化圏の少女や女性をめぐる暴力性と結びつくイメージ保持し、またそれが展開していることを述べた。

以上の分析を通じ、本論文では、澁澤文化圏が、現代的観点から評価され得る文化政治的な批評性を持つことを指摘し、その一方で女性ジェンダーに関する価値規範の問題性を具体的に論じた。また、澁澤文化圏の問題性については個別の章の検討の後、終章において、田崎英明が規定する「サディズム」の問題点からまとめ直した。